

群	E03 - 03
教	
セ	平16.220集

まとまりのあるホームルーム集団を 育成するための実践的研究

- リーダーを生かした学校行事づくりを通して -

特別研修員 星野 朋樹 (県立桐生南高等学校)

《研究の概要》

本研究は、高校2年生を対象に体育祭、文化発表会、修学旅行という3つの学校行事の中に、生徒が互いに関わり合い切磋琢磨する場面をつくり出すことで、クラスが成長していくことを、実践を通して明らかにしようとしたものである。具体的には、リーダーを中心に生徒全員が協力し、互いの意見や個性を認め合い、充実感を持って学校行事をつくりあげていく活動を支援することで、まとまりのあるホームルーム集団の育成を目指した。

【キーワード：学級経営 高等学校 学校行事 リーダー まとまり】

主題設定の理由

高校生にとって様々な経験を積むための最も重要な場所の一つは学級であると言われる。集団の中で様々な役割や責任を果たし、他のメンバーとの葛藤を経験しながら自分の長所・短所・適性に気付き、自己理解を深めていく。こうした高校生の時期に、同じ目標に向かって自主的な活動が行われることが重要である。そしてそれをうまく進めるためには皆を束ねるリーダーが必要である。生徒たちが、リーダーを中心に互いに協力し合い、目標に向かって努力することで、自分たちの力でやり遂げたという満足感や達成感を感じることができれば、大きな自信を得ることができるであろうと考えた。

本クラス、第2学年B組は、男子27名、女子15名、計42名のクラスである。全体としては明るく素直な生徒が多く落ち着いてはいるが、一人一人がクラスの一員であるという意識は低かった。また相手の立場を考えずに身勝手な言動をとる生徒や集団の中で自分の役割や責任を果たしていない生徒もあり、クラスとしてはまとまりがなくばらばらの状態であった。この現状を変えるには、教師が生徒たちと、より積極的に関わり支援していくことが必要であると考えた。このころ、クラス委員長とそれ以外の2名の男子が生徒会の本部役員選挙に当選したのをきっかけに、クラスのリーダーとなり得る状況ができてきた。彼らは明るく責任感があり、クラス全体のことを考えて行動することができる。また向上心もあり、リーダーとしての資質を十分に備えている。現在のクラスが集団として成長していくためにはそれを束ねるリーダーの存在が不可欠である。もし彼らが集団の中で力を発揮してくれたら、クラスを良い方向へと引っ張っていってくれるのではないかと考えた。

以後大きな学校行事が3つ(6月の体育祭、7月の文化発表会、11月の沖縄への修学旅行)控えていた。これらの行事を通し、生徒が互いに関わり合い、切磋琢磨する場面をつくり出していけば、リーダーを中心として協力し、まとまりのあるホームルーム集団が育つと考え、本主題を設定した。

研究のねらい

3つの学校行事（体育祭、文化発表会、修学旅行）を通し、リーダーを中心にクラス全員で力を合わせ努力することで、クラスが集団としてまとまり、成長していく過程を、実践を通して明らかにする。

研究の見通し

- 1 体育祭の準備期間において、優勝を目指して個人の役割と応援態勢を確認する。リーダーは、クラス全員が楽しく競技し、一体感のある応援ができるような雰囲気づくりを担う。リーダーの仲間への思いを共有させていくことで、クラスの一員として一体感を持たせていく。その結果級友が勝った時は全員で喜び、負けた時は悔しさを共有することができれば、一人一人がクラスという集団に所属することの喜びを感じることができるとであろう。
- 2 文化発表会の準備期間において、体育祭の振り返りをする。そして入賞を目指してクラスという集団の中で自己の果たすべき役割を認識する。リーダーは練習計画を立て、昼休みや放課後の練習参加を呼びかける。また級友の意見を聞きながら皆と協力して作品（ダンス）をつくっていく。その過程で生徒たちは様々な葛藤を経験しながら集団の目標達成のために努力する。そうすることでクラスとしてひとつにまとまることの大切さに気付くであろう。
- 3 修学旅行とその準備期間において、事前学習、過去の行事の振り返りをする。そして楽しく有意義な修学旅行にするための心構えを確認する。リーダーは旅行中の楽しい雰囲気づくりとして、レクリエーションを計画する。また旅行班の班長を選出し、班長は小集団のリーダーとして班員をまとめる責任を持つ。こうした活動を通し、共通の目標を持つことで、クラスの集団としてまとまる意識が高まるであろう。

研究の内容

1 基本的な考え方

- (1) 「まとまりのあるホームルーム集団」の育成について

『皆で話し合って決めた目標』に向かって、楽しく協力して活動し、互いの意見や個性を認め合いながら、全体で充実感や満足感を共有することのできるホームルーム集団」とする。そして3つの学校行事（体育祭、文化発表会、修学旅行）を通して、目指すホームルーム集団に迫りたいと考える。

- (2) 「リーダーを生かす」ための配慮とは

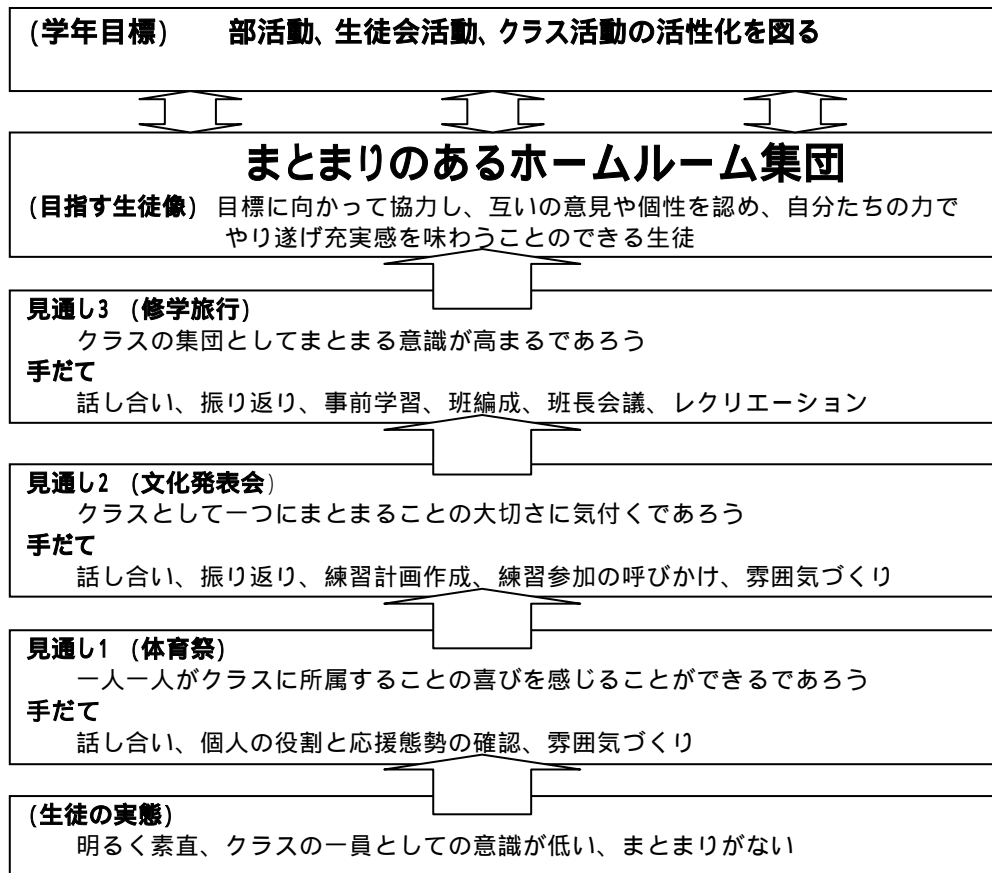
各行事の前にリーダーと教師を交えて、クラスとして行事にどう取り組んだらいいか入念に話し合いをする。リーダーとして自分の置かれた立場を十分に理解したうえで、クラス全体のことを考え自分たちの役割と責任を果たす。具体的には、リーダーがクラスの先頭に立ち、行事に向かって楽しく取り組めるような雰囲気づくりを担う。教師はそのための支援をする。リーダーが積極的に行事に取り組む姿勢を示し、リーダーシップを発揮することができれば、他の生徒もそれに協力していくと考えた。

- (3) 「学校行事づくり」とは

体育祭、文化発表会、修学旅行の3つの学校行事を取り上げる。各行事の準備期間における活動と行事そのものを通して、生徒全員が成功・失敗・葛藤を体験し、そこでの学びや気付き

を次の行事に生かしていく。この学びや気づきを通して、クラス全員が満足できる学校行事をつくりあげていくことができれば、生徒たちは人間的に成長し、まとまりのあるクラスになっていくと考えた。

(4) 全体構想図



2 実践の概要及び結果と考察

本研究では、生徒への事前、事後のアンケート、発言や感想、行動の様子などにより、考察を進めていくものとする。

(1) 一人一人がクラスという集団に所属することの喜びを感じることができたか。【見通し1】

ア 実践の概要

新しいクラスになって初めての学校行事が南陵杯（体育祭）であり、ばらばらだったクラスがひとつにまとまるきっかけとしては絶好の機会であると考えた。全学年全クラス対抗の行事であるため、盛り上がるために揃いのTシャツを考案し、クラスの団旗を作製した。出場種目に関しては、各自の希望を最優先して話し合いで決めた。競技に関しては、個人としてはどう取り組んだらよいのか、友人が競技している時はどうしたらよいかを考えるために、事前にアンケートを実施し、クラス全体で確認した。また、リーダーは体育祭の前に、どのようにしたらクラスはまとまり、体育祭を成功させることができるのかを考えた。その結果、皆のやる気を出させるために、全員で応援しようと声をかける、応援の仕方を決め、応援用のポンポンを作る、先頭に立って体育祭を楽しむということが決まった。そして担任教師とともに体育祭の最中彼らの活動を支援した。

イ 結果と考察

本クラス2年B組は男女とも運動部に所属する生徒が多いためか体育祭当日は彼らが活躍する場面が多々見受けられた。また応援席ではほぼ全員の生徒が声を張り上げて応援していた。

結果としては、2学年では見事優勝することができた。学校全体でも12クラス中3位となるなど予想以上の大健闘となった。体育祭終了後はなかなか教室に戻ろうとせず、記念撮影をしたり担任教師を胴上げしたりしていた。

後日のアンケートの中で、体育祭がうまくいったことの原因として生徒たちは、皆が全力で頑張ったから(22名)、クラスが団結したから(13名)、全力で応援をしたから(2名)を挙げている。そして生徒たちはまた、体育祭は楽しかった(95%)、友人の応援はできた(93%)、クラスが盛り上がった(85%)、体育祭は成功だった(83%)と答えている。

そして、リーダーは、体育祭の前後で何か変わったことがあるかという質問に対して、話をしたことがない友人とも話すことができるようになった、以前よりもクラス内の会話が増えた、グループで固まっていたのがとけてきて、クラスの雰囲気明るくなった、クラスの皆の仲が良くなったと答えている。また、担任教師は、「一人一人が精一杯頑張り、良い結果を残すことができた。クラス内の温度差が少しなくなったような気がする。最初は消極的だった生徒も、リーダーの体育祭を楽しもうという姿勢に引き込まれていったようだ」とコメントしている。資料1は、体育祭終了後のリーダーAの感想である。

資料1 リーダーAの感想

今日はとても楽しかった。いい結果も残せし、何よりクラスがまとまって一生懸命頑張れたことが一番嬉しかった。1位まであと少しですごく悔しかった。来年は絶対1位を取る。今日はなんていい日だったのだろうと思う。

これらのことから生徒たちは体育祭を通して、クラスという集団に所属することの喜びを感じることができたといえる。

(2) クラスとしてひとつにまとまることの大切さに気付くことができたか。【見通し2】

ア 実践の概要

体育祭を振り返り、また皆で喜びを共有するためにはどうしたらいいのかクラス全体でうまくいった原因について話し合った。

リーダーは、どんな発表にしたいかをクラス全体によく意見を聞くこと、文化発表会当日までの練習計画を作ること、クラス全体に練習参加を呼びかけることに力を尽くした。

イ 結果と考察

文化発表会まであと1ヶ月程となったが一向に準備や話し合いが始まる気配がない。その後期末試験を挟み、何も決まらないまま当日まであと二週間ほどとなった。その時リーダーBが相談にやってきた。皆が試験勉強や部活動を優先してしまい、ほとんど何も決まっていないという。そこでロングホームルームの時間を使ってクラス全体で話し合いの機会を持った。曲はすぐに決まった。ダンスについては10分間の演技時間の中で、男子と女子に分かれ、それぞれ3分ずつ、男女一緒に3分ずつ踊ることが決まった。その後、リーダーが練習計画を作り、朝のショートホームルームで呼びかけをして、昼休みや放課後を使ってダンスの練習が始まった。最初のうちは集まる人数も少なかったが、リーダーの積極的な呼びかけで、日を追うごとに参加人数が増えていった。練習は順調に進むかに思われた。

ところが本番の5日前となった日、女子の間で、ダンスの振り付けを巡って意見が対立してしまっただけである。C子とD子の2人が「どうしても自分たちの考えた振り付けで踊りたい」と言い出した。それ以外の女子13人は「皆で話し合って決めたダンスの方がいい」と言ってお互いに譲らない。双方から不満が出始め、このままでは女子が分裂してしまうかに思われた。見かねた担任教師が中に入り、調整を試みたが、なかなか意見がまとまらない。しかしこれもよい演技をしようという意志の前向きなぶつかり合いで、成功へのステップであると捉え、方向付けだけをして後は自分たちで解決を図るように指導した。翌日になって結局クラス全体のことを考えたのか、女子の多数派が少数派に譲ることで一件落ち着いた。もう何が何でも頑張るしかないといった雰囲気があった。前日リハーサルの後、午後7時過ぎまで練習し、発表当日

は朝7時30分に全員が集まって最後の調整をすることになった。

そして本番であるが、演技としては特に良いとは言えなかったが、まあまあのできであった。アンケートの結果を見ると、自分たちの演技に満足した(男子88%、女子27%)、楽しかった(男子88%、女子43%)、まとまっていた(男子77%、女子7%)と答えている。男子に比べ女子がかなり低いのは、直前になって意見の対立があったためと考えられるが、少し尾を引き過ぎてしまった感がある。ただクラス全体のことを考えて行動したと答えている生徒が多かった。つまり、クラスとして一つにまとめることはできなかったが、まとめることのむずかしさには気付いたと言える。そして、文化発表会後のアンケートでは、「来年は、最優秀賞を取った3年生のような演技をしたい」と全員が答えていた。

(3) クラスの集団としてまとまる意識が高まったか。【見通し3】

ア 実践の概要

充実した修学旅行にしようという意識を高めるために、再度文化発表会を振り返り、目標設定をした。旅行中の生活の中心となる班を決め、班長(班のリーダー役)を選出し班長が班員をまとめた。リーダーは、バスの中でレクリエーションを計画し、その司会と進行をした。その他、旅行中の楽しい雰囲気づくりを担った。旅行後、クラス全体で振り返りを行い、事前と事後で自分とクラスはどう成長したのかについて考えた。

イ 結果と考察

修学旅行では何としても生徒たちに、「楽しかった、満足した、まとまった。」という思いをさせたいと考え、再度文化発表会を振り返らせた。アンケートによると、旅行は集団行動なので我慢することも必要だ(90%)、自分の役割と責任を果たそうと思う(93%)、クラスでまとまりたいと思う(83%)という結果が出た。文化発表会を反省し、皆で充実した楽しい旅行にしたいという意識持っていることが分かる。

班編成と班長の役割

旅行中は班単位で活動する場面が多く、小グループでのまとまりがクラスとしてのまとまりにつながると考え、班編成には特に気を使った。基本的には生徒達の話し合いによって決めさせた。文化発表会ではわがままを言って孤立してしまったC子とD子が心配であったが、無事思いやりのあるE子の班に入ることができた。

旅行先では班長の仕事は重要であると考え、毎晩1時間ほど班長会議を行った。次の日の出発時刻やスケジュールの確認等、細かい打ち合わせをした。班長には班員に対して責任を持って連絡事項を伝え、班員の健康状態や友人関係などにも気を配り、何か困ったことや問題などが起こったらすぐ報告することを徹底した。そして集合時間に遅れたり旅行規則を破った場合には、当日は夜間外出を禁止させるなど、班員全体に連帯責任を負わせることにした。その結果、時間に遅れたり規則を破る者は日を追うごとに減っていき、班としてまとまった行動がとれるようになっていった。自分勝手な行動をしたり、クラスの秩序を乱すものはいなかった。個人が自覚を持って行動したことと、適任者が班長になり、班をよくまとめたからであると考えられる。資料2は班長Fの感想である。

資料2 班長Fの感想

人の本当の姿が見られた。色々な個性を生かし自分のことも主張しながら班をまとめるのは苦労した。

レクリエーションの実施

レクリエーションを実施するにあたっては事前に3人のリーダーを呼んで話し合いを持った。彼らは、クラス全員が参加できるようなものがあるだろうと言う。そこでビンゴゲームの形式にしたクイズと2つのゲームを実施することにした。いつ実施するかについては、これから楽しい旅行が始まることを予感させるためには初日があるだろうということで、まず行きの中のバスの中でクイズを実施した。内容はこれから向かう沖縄の文化や見学地に関するものであったため、皆で盛り上がる事ができた。担任教師も「あれではずみがつきましたね」と感想を述べ

ていた。その後も一日に一度バスの中でレクリエーションを行ったがどれも予想以上に好評で旅行中の雰囲気づくりとして有効であった。資料3はリーダーAの感想であるが、クラスのために行動しようとしたことが分かる。

旅行中は、一人一人が楽しい旅行にしようという意識を持って行動していた様子が見ええた。普段では見られないような表情も多々見受けられた。最終日に無事に学校に到着した時、疲れてはいたのだろうがほとんどの生徒たちが満足した表情をしていた。

事後の振り返りの中で生徒たちは、旅行の前後で変わったこととして、色々な友達と話ができて仲良くなった(23名)、友達の色々なところが分かった(9名)、前よりも周りのことを考えるようになった(7名)と答えている。そしてクラスは良い雰囲気でもとまった(93%)と感じた理由を資料4のように答えている。またリーダーGの感想(資料5)からもそのことが分かる。

このことから、楽しい旅行にしようという共通の目標を持ち、まとまることの意識が高まって行動することができたといえる。

資料3 リーダーAの感想

司会がうまくいかなかったが大変だったが、皆を喜ばせようと頑張った。司会をやったことで、自分は人間的に成長できたと思う。

資料4 クラスがまとまったと感じた理由

- ・旅行が楽しかったから(14名)
- ・皆が楽しそうだったから(7名)
- ・団体行動がとれていたから(6名)
- ・トラブルがなかったから(4名)
- ・皆が協力していたから(3名)
- ・楽しくしようという気持ちが同じだった(2名)
- ・リーダー、班長がしっかりしていた(1名)

資料5 リーダーGの感想

旅行から帰ってきてから皆がこころなしか和やかな雰囲気になった。友達の輪が広がり、クラスをまとめていける自信が少しついた。

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

生徒たちは学校行事を重ねるごとに、クラスの一員であるという意識が高まっていった。クラス全体での話し合いでは活発に意見が出るようになり、協力態勢が徐々にできてきた。自分のことを主張するだけでなく、周りのことを考えられる生徒も増えてきた。また失敗をしたが、それを次につなげる失敗、意味のある失敗にすることで次の行事に生かすことができた。

リーダーは自分の置かれた立場をよく理解し、クラスのために自分たちの役割と責任を果たすことで、リーダーとしての自覚が深まっていった。

最後の修学旅行では、よい旅行にしようという生徒たちの願いが一つになり、「4日間があったという間だった。もっと皆でいっしょに沖縄にいたかった。一生忘れられない思い出ができた」という生徒の感想に見られるように満足できる素晴らしい旅行が経験でき、まとまりのあるホームルーム集団になったといえる。

2 今後の課題

今後は学校行事以外の場面においても、男子と女子の間での協力態勢や関わり合いを深め、女子のリーダーを育てていきたいと考える。来年もう1年このクラスで共に過ごすわけであるから、一人一人がさらに成長し、最上級生として他の模範となるようなさらにまとまりのあるクラスになってほしいと願っている。

参考文献

- ・群馬県教育研究所連盟編著 『改訂新版 実践的研究のすすめ方』 東洋館出版社 (2001)
- ・佐藤有耕編著 『高校生の心理』 大日本図書 (1999)